

防火水そうではじまる

～卒業設計の実現と新たな地域コミュニティの形成～

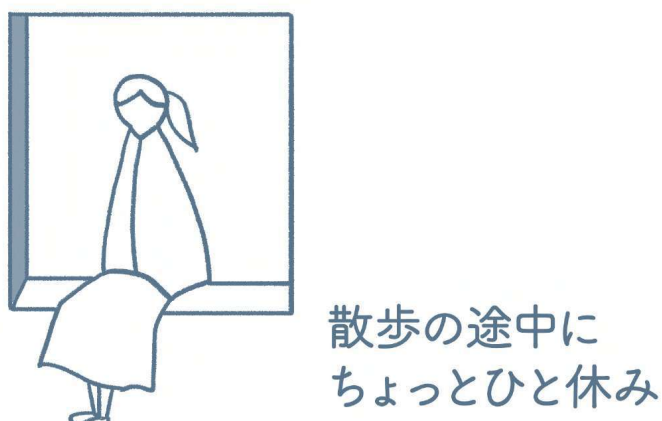
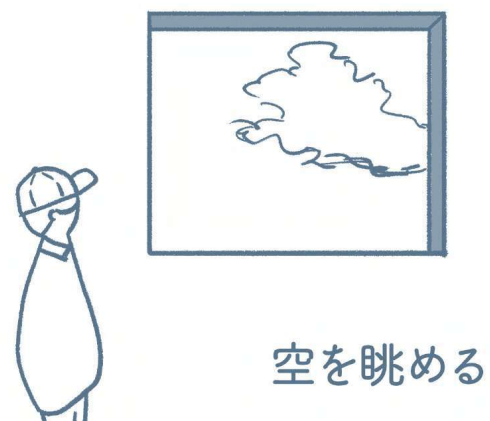
卒業設計「防火水そうではじまる」が、人をつなぎ、思いをつなぎ、実現をすることになる。

4枚の壁と大小様々な開口は、緩やかに視線を通し、人のふるまいへと繋ぐ。

人と話さなくても良い。

視線を通して人の存在を感じることが地域コミュニティの第一歩である。

防火水そうはやがてまちの小さな居場所となる。



2022

- 6.18 ○JIA 全国学生卒業設計コンクール 2022「防火水そうではじまる」金賞受賞
- 8.22 ○三島支所にて作品展示
- 11. ○旧三島町上岩井区長 A 氏と出会う
上岩井地区の防火水そう (No.36) に卒業設計を実現しないかと提案される。
- 11.20 ○上岩井町内会総会で地域住民の合意を得る
- 12.16 ○初期プロジェクトメンバー・町内会役員顔合わせ
打ち合わせを行った。具体的な今後の進み方や、プロジェクトの最終目的を確認。
実現をするにあたって、地域住民に向けてワークショップを計 3 回行うことが決まる。
- 12.23 ○三島支所とコメセンにプロジェクトに今後の意向を報告

2023

- 1.13 ○第 1 回ワークショップの打ち合わせ
- 1.19 ○第 1 回ワークショップ①
- 1.21 ○第 1 回ワークショップ②
- 1.31 ○第 1 回ワークショップの振り返り
- 2.2 ○第 2 回ワークショップの打ち合わせ
- 2.9 ○第 2 回ワークショップ①
- 2.11 ○第 2 回ワークショップ②
- 2.27 ○第 2 回ワークショップの振り返り
- 3.1 ○第 3 回ワークショップの打ち合わせ
- 3.9 ○第 3 回ワークショップ①
- 3.11 ○第 3 回ワークショップ②
- 3.20 ○第 3 回ワークショップの振り返り
- 3.22 ○長岡市フェニックスイースト庁舎訪問
建築申請について確認。
- 3.29 ○ワークショップ後の進め方の打ち合わせ
- 4.12 ○コアメンバー打ち合わせ
- 4.26 ○コアメンバー打ち合わせ
- 5.11 ○コアメンバー打ち合わせ
地域住民へのアンケート調査実施
- 5.17 ○コアメンバー打ち合わせ
- 5.24 ○修士研究中間発表
- 5.31 ○コアメンバー打ち合わせ
- 6.7 ○コアメンバー打ち合わせ
- 6.14 ○コアメンバー打ち合わせ
- 6.21 ○コアメンバー打ち合わせ
- 6.28 ○コアメンバー打ち合わせ
- 7.5 ○コアメンバー打ち合わせ
- 7.6 ○与板消防署で打ち合わせ
防火水そうの空間設計において、消防署員様での注意点を確認。
- 7.12 ○コアメンバー打ち合わせ
- 7.15 ○上岩井町内会臨時総会
- 7.19 ○三島中学校ワークショップ
三島中学校 1 年生の親子行事でワークショップを実施。
中学生とその親御さんに、地域コミュニティについて考えてもらいながら、防火水そうのみんなが「集まれる場」を考えるワークショップを開催
- 7.31 ○山長組で打ち合わせ
地元企業の山長組に協力してもらうことに。
- 木作業
大学内で木材を加工し、現地で組み立て。
- 9.14 ○大森木工と木作業
大森木工の技術者の方に木加工方法を教えてもらいながら木製軸組を制作。
研究室の学生も交え、学生とプロの技術者が関わる機会となった。
- 木作業
大学内で木材を加工し、現地で組み立て。
- 10.1 ○防火水そうの空間完成 (予定)
プロジェクトに関わった人々と地域住民に向けて防火水そうの空間のお披露目。

00. 卒業設計「防火水そうではじまる」

消えゆく旧三島町

私の住む新潟県長岡市旧三島町では、住人同士の繋がりが希薄であると感じる。
人口減少によって、地域ぐるみでの活動は衰退し、現代人の生活スタイルの変化は近所付き合いを億劫なものとした。
このままでは、三島はバラバラになってしまう、地域性が失われてしまうのではないだろうか。

コミュニケーションのはじまりの場

バラバラになってしまう三島を繋ぎ止めるためには、住人同士のコミュニケーションが必要である。
挨拶のような偶発的に起こるコミュニケーションが重要であると考え。
これは、暮らしに欠かせず、人間らしい行為である。
まちの中で活発に行われることで、住人のコミュニティは広がり、地域愛を育むことができる。
そこで、このコミュニケーションの始まりとなる場を提案する。

ゲリラ的防火水そう

三島を歩いていると防火水そうを見つけた。
そこは、近くの住人がゲリラ的に自転車小屋やバス停として利用していた。



点在する小さな防火水そう

三島には 116 カ所の防火水そうが消火栓と 200m 間隔で点在しているが、そのほとんどが草木に覆われている。
防火水そうを、まちの小さなコミュニティの場として再生することで、安全装置である防火水そうは地域住民の拠り所となり、人と人をつなぐ小さな地域拠点となるのではないだろうか。
そこで、まちに点在する 116 カ所の防火水そうに、住人同士の偶発的コミュニケーションがはじまる場を設計する。

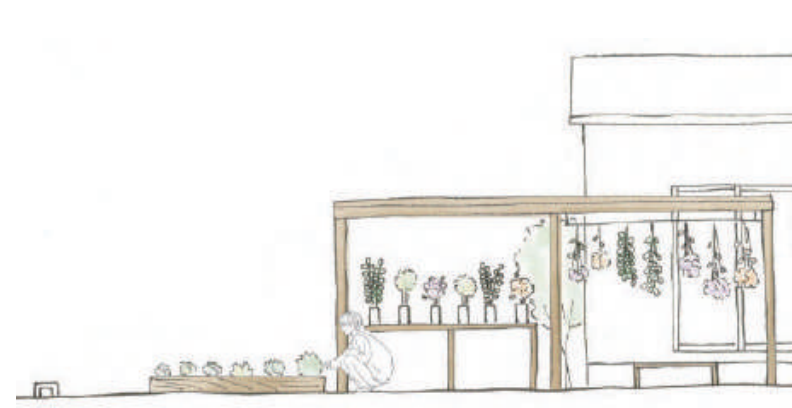
きかけの空間

三建築を媒体として人と何かを共有することで、コミュニケーションのはじまる「きかけ」となり、まちの小さなコミュニティが生まれると考えた。



No.36 の防火水そう

この防火水そうの周辺地域では、住人たちが積極的に地域を飾る活動をしている。また、花が好きな人が多く住んでいる。そこで、花を趣味とする人を中心に花を育て、花を飾り、花を送り合う居場所を提案した。



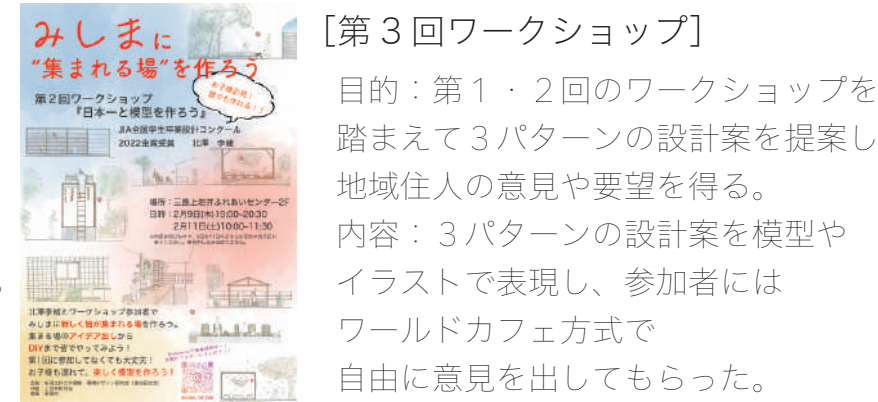
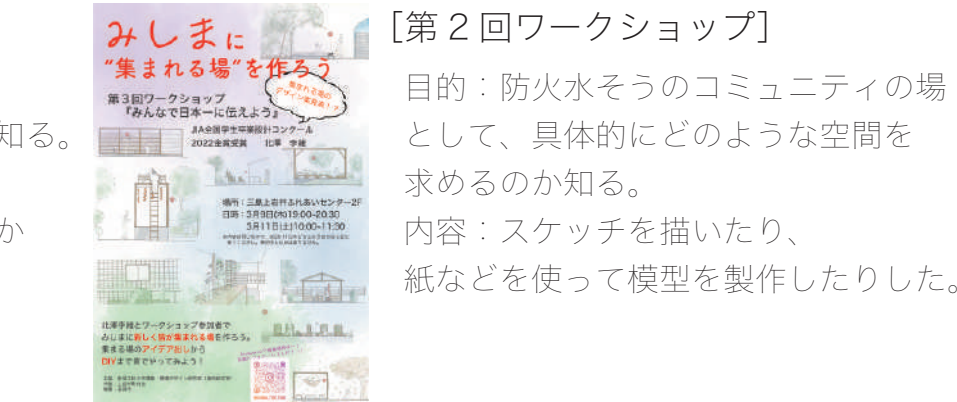
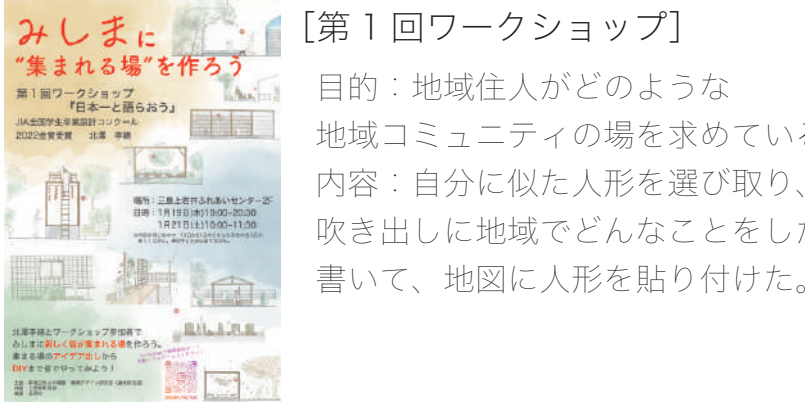
01. プロジェクトがはじまる

プロジェクトのはじまり

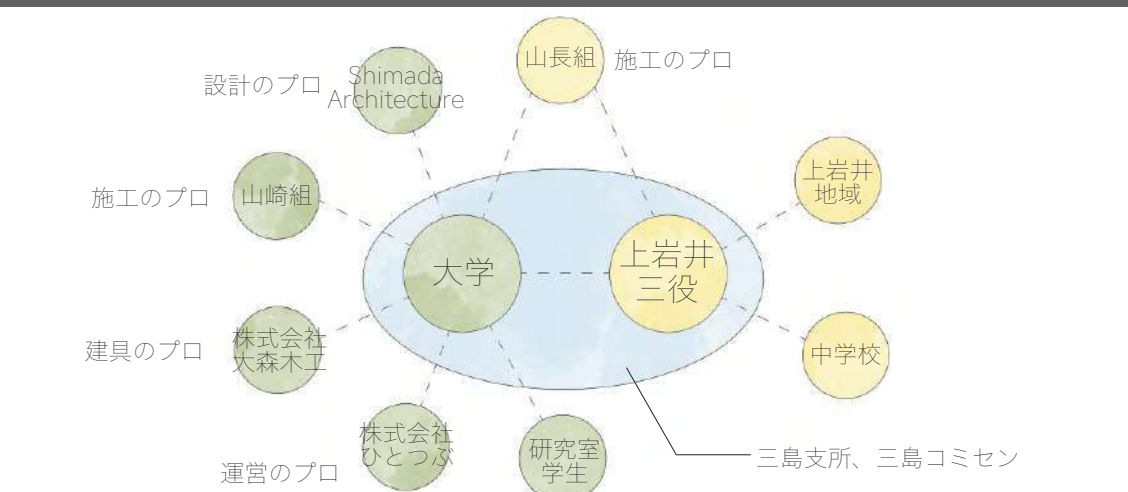
JIA 全国学生卒業設計コンクールで金賞を受賞し、地域に報告するために卒業設計を展示した。
その後、作品を見た上岩井区長 A 氏から上岩井地区に実現しないかと提案された。
地域住民同士の繋がりの希薄さや、住人同士が関わるきっかけとなる場の必要性に共感してくれたようであった。
地域と大学で協力し、地域の人が偶発的コミュニケーションができる場を作ることとなった。

ワークショップのはじまり

卒業設計は、私がまちを歩いてわかったことをもとに設計しているため、かなり個人的である。実際に作るにあたって、まずは地域住民のリアルな思いや考えを聞きたいと思った。
ワークショップには、多くの地域住民が参加してくれた。たくさんの人と関わり、様々な思いを聞くことができた。

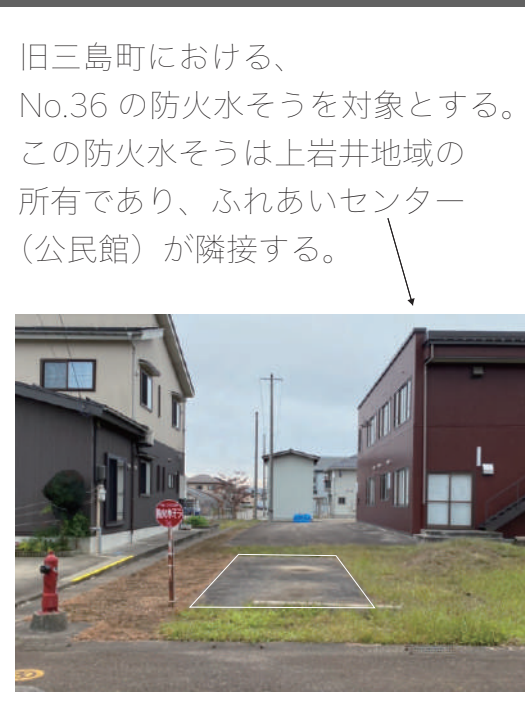


02. プロジェクト体系



大学 (学生) と上岩井地域を中心に、設計・施工・建具・運営など様々な業種のプロと交えてプロジェクトを進めている。ワークショップなどを通して地域住民や中学校にも参加してもらい、地域と共にコミュニティの場をつくることを目指した。また、行政にも地域活動として応援してもらっている。

03. 対象敷地



04. 上岩井地域のコミュニティ現状

三島の歴史上、山側に最初に集落ができ、時代と共に田んぼを切り開いて集落を広げてきた特徴がある。
上岩井地域の現状としては、山側に昔ながらの家々が立ち並び、田んぼ側のはなみずき団地に新しい家や家族が暮らしている。山側は老年層が多く、団地には子育て世代が多い。
よって、県道を境に世代が分かれ、両者間でのコミュニケーションは希薄になっている。

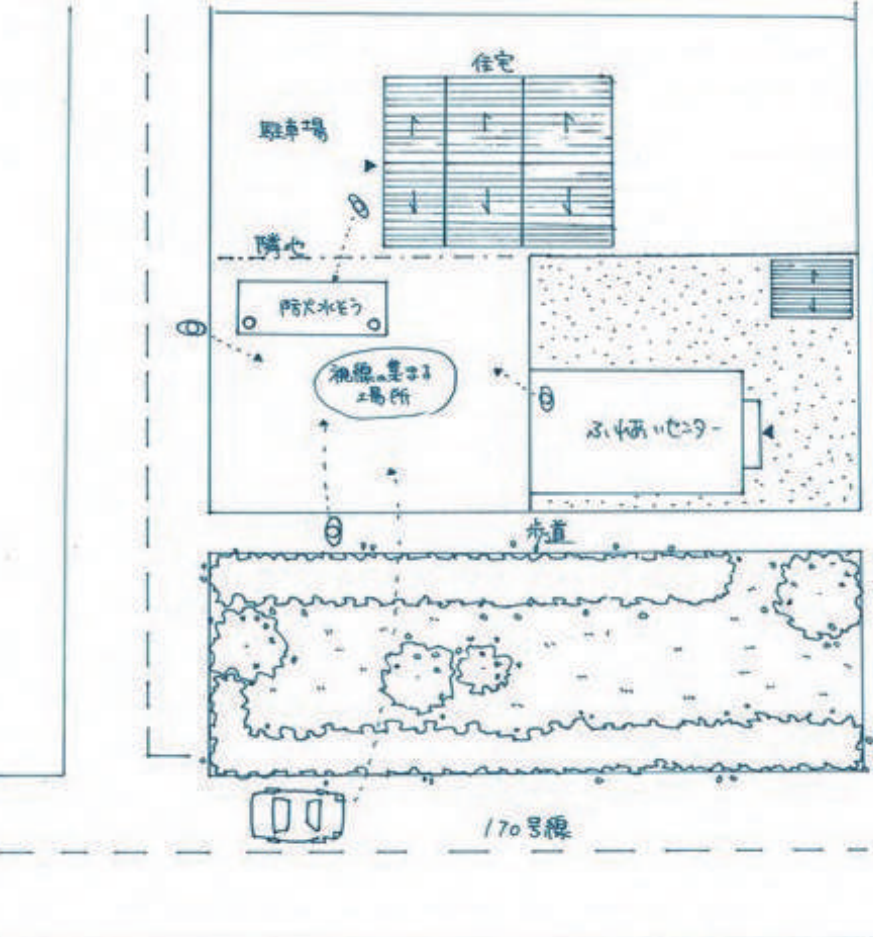
05. ワークショップを終えて

ワークショップでは、空間の利用方法として多くのアイデアが出てきた。また、参加者と話をする中で、地域住民同士で関わる場が必要であると再確認した。
年齢に縛られず、誰もが訪れることができ、そこではささやかに人と人が繋がる場を作りたいと考えた。

06. 「居場所ではじまる」

地域の居場所をつくる

地域のコミュニケーションが必要であるということがわかったが、いきなり新しい人と関わることは困難である。そこで、コミュニケーションのきっかけとなるような、地域の誰もが立ち寄れるちょっとした居場所をつくる。まちに人を出し、その居場所に立ち寄ることで、それを見た住人は、地域にどんな人がいるのかわかることができる。そこを通りかかった人が挨拶をしたら、小さな関わりが生まれるかもしれない。



地域の居場所をつくる

対象敷地である No.36 の防火水そうは、歩道に囲まれ、住宅地に隣接しているため、周りからたくさんの視線が集まる場であった。
そこを人の居場所をするためには、視線の操作が必要であると考えた。

壁によって視線を操作する

防火水そうに集まる視線を壁によって操作しようと考えた。
居場所にいる人とまちの人とを緩やかに視線によってつなげる。

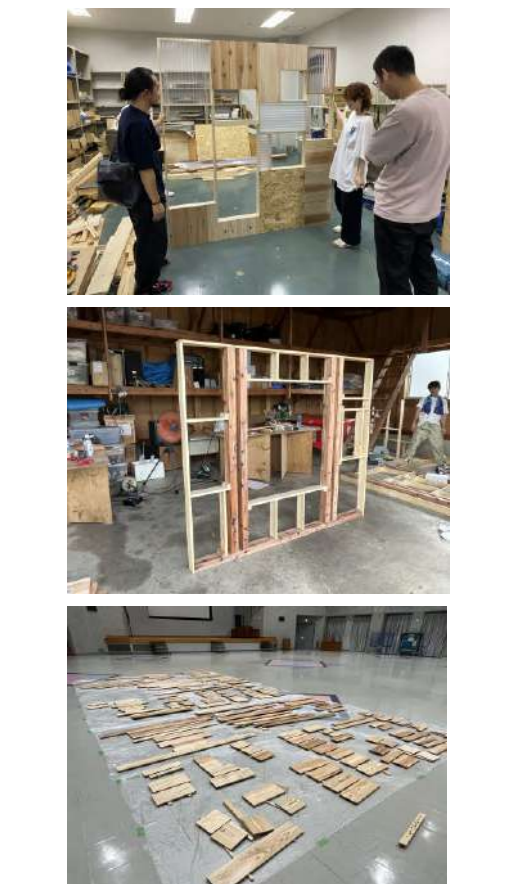


スタディ模型



地域の居場所をつくる

壁は木材での制作になる。
軸組を 1×4 材、仕上げを杉板としている。



新潟工科大学大学院
北澤 李緒
mail:kitazawa_r@cc.niit.ac.jp